

錦遺跡

福岡県八女市納楚所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第102集

2014

八女市教育委員会

錦遺跡

福岡県八女市納楚所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第102集

2014

八女市教育委員会

序

古来より、自然豊かな地であった八女地域には、先人たちの足跡を示す多くの文化財が各所に残されています。

中でも星野川と矢部川との合流地点の右岸に位置する津江地区は、弥生時代の中ごろを中心とした遺跡が数多く埋蔵されている地域としてよく知られています。

近年、携帯電話の普及は目覚しく、さらに携帯電話と携帯情報端末（PDA）が融合した「スマートフォン」が急激な浸透の兆しを見せ、今年度（平成25年）中には通常の携帯電話の契約数を超える勢いです。その結果、携帯電話の利用者数と1人当たりの情報通信量が増加し、全国的に通信の品質保持のための電気通信事業者による基地局増設が行われています。八女市内においてもそれは例外ではなく、今回の調査はそういった通信事業者の一つによって計画された基地局建設に伴う緊急発掘調査です。

本書は弥生時代の先人たちの記録を一部収録したものにすぎませんが、本書が皆様方の埋蔵文化財に対する認識とご理解につながり、さらには学術研究上においても役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査に関し多大なご理解とご協力をいただきましたソフトバンクモバイル株式会社九州技術部、そして発掘調査に従事していただいた作業員の方々、そして調査報告書などの作成にかかわった多くの方々に対し、心から感謝の意を表する次第であります。

平成26年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西 島 民 生

例 言

- 1 本書は、八女市教育委員会が八女市納楚に所在する弥生時代後期を中心とした錦遺跡において、平成24年度にソフトバンクモバイル株式会社九州技術部より委託を受けて八女市教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となって実施した。
錦遺跡の現地調査は平成24年12月25日から平成25年2月8日まで行った。
本報告に伴う整理作業は平成25年度に行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構は、その種類ごとに記号を付し、溝状遺構をS D、不明遺構をS Xと表記した。
- 4 本書に使用した測量図の作成は国土地理院の設定する第Ⅱ座標系を基準とした。各種測量図の浄書及び出土遺物の実測図作成・情緒は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した現地写真・出土遺物については永田が撮影した。
- 6 本書使用の方位については、すべて真北である。
- 7 本書の執筆、及び、編集については永田が行った。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は現八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

1	調査の経過	1
A	調査に至る経過	1
B	調査体制	1
2	遺跡の立地と歴史的環境	2
3	調査の内容	4
A	発掘調査の概要	4
B	調査	7
1)	遺構と出土遺物	7

図版 (PLATES)

P L 1 ~ 2

錦遺跡

挿 図 目 次

- 第1図 錦遺跡 周辺遺跡分布図〔1／10, 000〕
第2図 錦遺跡 位置図〔1／2, 500〕
第3図 錦遺跡 遺跡周辺図〔1／200〕
第4図 錦遺跡 1号溝状遺構（SD-01）土層図〔1／40〕
第5図 錦遺跡 調査地境界土層図〔1／40〕
第6図 錦遺跡 1号溝状遺構（SD-01）出土土器実測図〔1／3〕

1 調査の経過

A 調査に至る経過

携帯電話基地局の選定は地形に影響されるため、異なる電気通信事業者の基地局がお互い近くに建設されることは珍しいことではない。九州を南北に縦断する幹線道路である国道3号線と、九州北部を東西に横断する442号線が交わる納楚交差点付近において某社の基地局が建設されたのに続き、24年度に入ってすぐソフトバンクモバイル株式会社九州技術部から、その付近の基地局建設が可能な土地の選定に関して文化財の存在について相談があった。この交差点の北側には赤氏遺跡があり、弥生時代中～後期、古墳時代前期の竪穴住居が40軒以上検出されており、この周辺における開発については遺跡が存在する可能性が高く、他の候補地を挙げてもらうよう協議を重ねたが、先述の通り選定に関しては地形が大きな要素となり、候補地の変更は難しいとの回答であったので、遺跡の広がりを確認するために確認調査をおこなった。平成24年6月20日、トレンチを南北方向に設定し確認したところ、溝状遺構が検出され、その中から土器片が出土したため、協議の上緊急調査を行うことになった。調査は平成24年12月24日から翌25年2月8日まで行い、整理作業と報告書作成を25年度に行った。

B 調査体制

【平成24年度】 発掘調査

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西 島 民 生
教育部長	飯 田 せつ子
文化課長	井 上 富 雄
同 係長	大 塚 恵 治
同 係員	永 田 寧
同 係員	渡 部 真 弓

【平成25年度】 整理作業

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西 島 民 生
教育部長	井 上 俊 裕
文化課長	井 上 秀 樹
同 係長	大 塚 恵 治
同 係員	永 田 寧
同 係員	渡 部 真 弓

なお、発掘調査にあたり、地権者である牛島康博様をはじめとし、近隣に居住される住民の皆様、そして納楚地区の方々には多大なるご配慮とご理解をいただきましたことに感謝の意を表します。

2 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

錦遺跡は、福岡県八女市納楚字錦に位置する。八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苺の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳縄山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦岳山地に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。古くは水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、今回調査を行った錦遺跡はその旧国道442号線と3号線が交わる納楚地区にある。

【歴史的環境】

当該遺跡周辺は、以前からの発掘調査等の成果により、弥生時代遺跡の一大密集地区であることが先学によって指摘されていた。ここでは錦遺跡が所在する八女地域をより理解するため、これまでに発掘調査を受けた周辺の遺跡を中心に、八女市西・南西部における弥生時代遺跡についての概略を記述する。

当該地は古くから弥生時代から古墳時代、歴史時代を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地

区として知られ、大規模な圃場整備事業の実施に伴い、弥生時代中期に属する集落の大規模遺跡や墳墓群の発見があった。また、同時に中世の遺跡群も発見され、当地区における埋蔵文化財の概要が明らかになってきた。いかに八女市西部における概要を記し、当遺跡を理解する一助としたい。

(概要)

八女市西部における遺跡の諸言気は縄文時代前期まで遡ることができ、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型土器が数多く出土している。後期に入ると南西部のアモメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓がみられるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しがみられるようになる。

弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。なかでも亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容はとらえられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内ではいまだ当時期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になることが多く、これらの遺跡の出現期にはすでに稲作が導入、または定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴住居が散発的にしか存在しなくなり、環濠のように大規模な遺構は全く確認できないようになる。ところが中期後半ごろになると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓息がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴う大集落形成の萌芽がみられるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取できる。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内席では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深桶式銅剣、鉄鈎が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭とともに、大規模集落同士の統合が進んでいることを連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に改作し前代とは比較にならないほどの大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡がみせるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を放棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向がみられる。原因は定かではないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半ごろから5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で増募活動を行っていることがわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（108m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家型石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半になると八女古墳群中から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m、円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号墳（墳丘47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取ることができる。6世紀前半～中

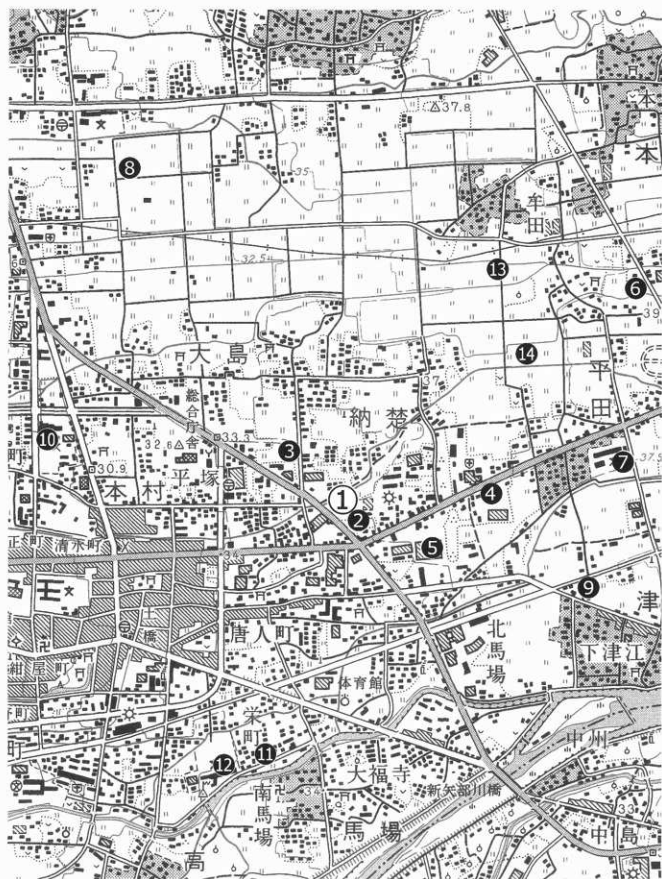
頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀などにある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半台になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎えることとなる。

3 調査の内容

A 発掘調査の概要

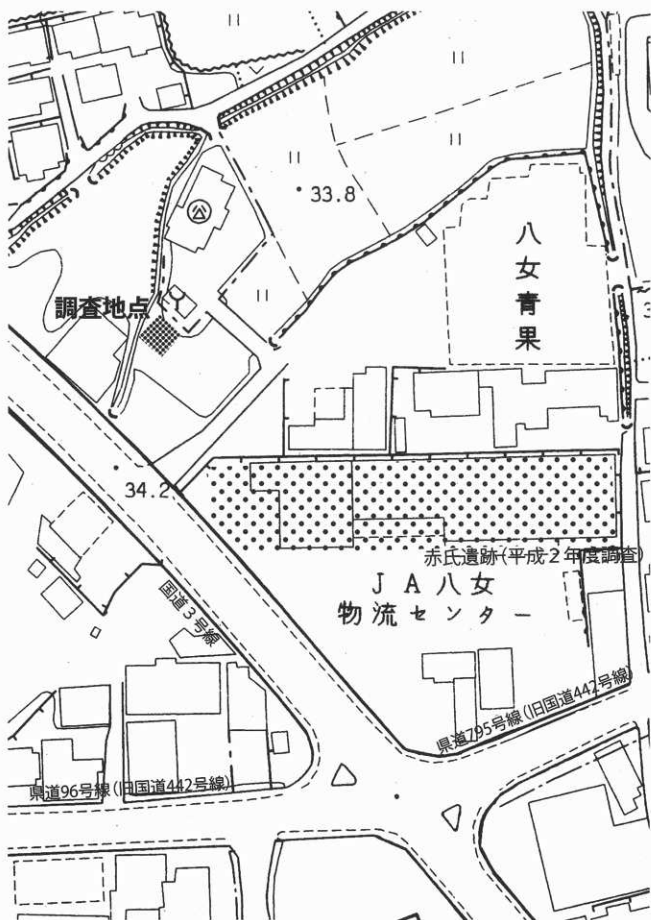
今回の発掘調査は携帯電話アンテナ設置予定箇所64㎡（8m×8m）を対象とした。平成24年12月バックホーにより遺構面を覆う畑地耕作土などを除去したのち、翌25年1月8日から人力で遺構の検出を行った。

今回の錦遺跡の調査前に行った確認調査で検出された溝状遺構を、当初北東から南西方向にトレンチを設定し確認したところ、溝状遺構は南北に走っていることが確認できたので、再度東西方向に別のトレンチを設定して断面を確認した。

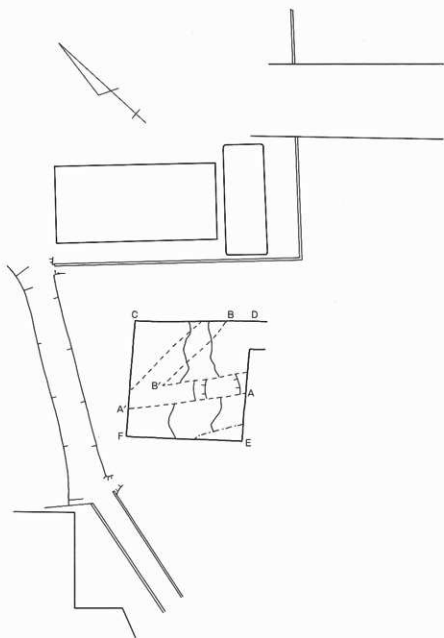


1. 錦遺跡 2. 赤氏遺跡 3. 万上田遺跡 4. 高島遺跡 5. 熊野遺跡 6. 口ノ坪遺跡
7. 後ノ江遺跡 8. 折橋院遺跡 9. 津江八升町遺跡 10. 福島中学校校庭遺跡 11. 洲ノ上遺跡
12. 南中学校校庭遺跡 13. 西原遺跡 14. 平田・六反田遺跡

第1図 錦遺跡 周辺遺跡分布図 (1/10,000)



第2図 錦遺跡 位置図 [1/2, 500]



第3図 錦遺跡 遺跡周辺図〔1/200〕

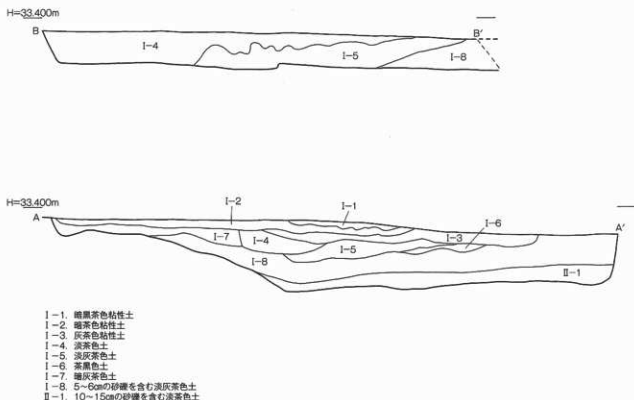
B 調査

1) 遺構と出土遺物

今回の錦遺跡で検出された遺構は溝状遺構が1条のみである。30軒以上の竪穴住居が検出された赤氏遺跡が南東側に近接している〈第2図〉ことを考えると遺構の密度は低い。

溝状遺構〈第3図〉〈第4図〉

南東―北西方向に走る溝状遺構で、幅は今回検出したところで最大5m20cm、深さ46cmを測る。幅は一定ではなく、断面も精緻さがみられない。南東側に近接する赤氏遺跡の集落は、この錦遺跡側に近い北東側付近に集中しているが、今回調査した錦遺跡において住居跡が全く検出されなかった。赤氏遺跡の概要報告では遺構検出面の土層の記述がないが、この遺跡は後世に削平を受けて遺構の多くが失われて

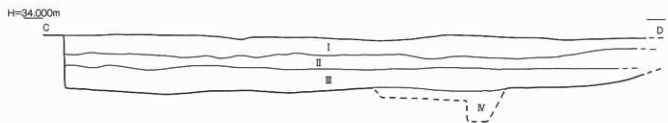
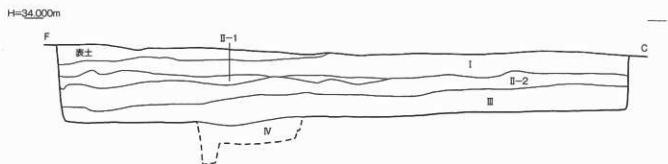
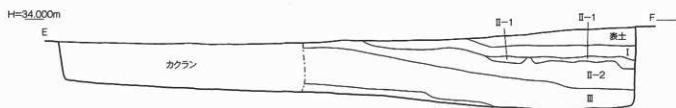
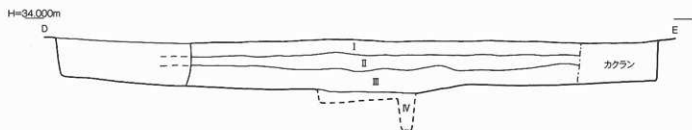


第4図 錦遺跡 1号溝状遺構 (SD-01) 土層図 (1/40)

いる可能性も考えられる。北西に約100m離れたところには、昭和63年に万上田遺跡で店舗建設に伴う発掘調査が行われており、古墳時代中期の竪穴住居1軒と、大溝 (SD-01) が検出された。大溝は北西-南東方向に走り、おおよそ今回の錦遺跡がある付近へと向っているが、今回の錦遺跡の調査では確認できなかった。

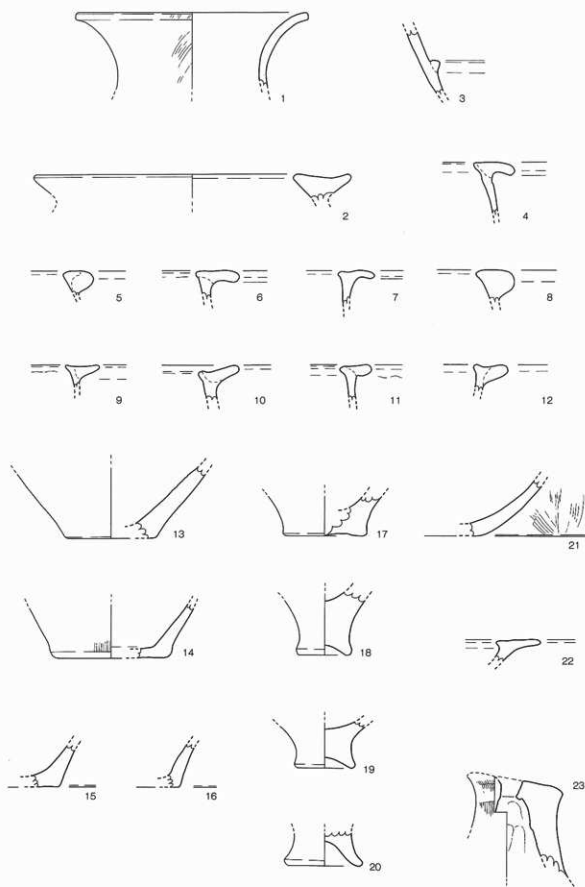
出土遺物 (第6図)

遺物のすべては溝状遺構からの出土である。1は弥生土器の壺で、肩部直上より上位の破片である。口唇部を平坦に仕上っている。胎土には長石を多量に含んでいる。2は弥生土器の壺で、肩部の破片である。突帯が1条あるが、表面は磨滅している。3は弥生土器の甕の口縁部破片で上面を指で押さえ、わずかなくぼみを作り出している。中期前半~中頃の所産か。4は弥生土器の甕の口縁部破片で口縁外側をわずかに垂下させ、内側を張り出させて鋤先状をなす、中期中頃の所産か。5は弥生土器の甕の口縁部破片で断面は丸みを帯びており、やや太い口縁部となっている。中期初頃か。6は弥生土器の甕の口縁部破片で外側にやや垂下した鋤先状口縁をなす。中期中~後半か。7は弥生土器の甕の口縁部破片でやや小型品で胎土は砂粒をほとんど含まず精緻。中期中~後半か。8は弥生土器の甕の口縁部破片で非常に厚く、大型品と考えられる。9は弥生土器の甕の口縁部破片で3と同類のものだが、器壁が薄く、小型品と思われる。10は弥生土器の甕の口縁部破片で3と同類。11は弥生土器の甕の口縁部破片で外面の口縁部付け根に指頭痕が残る。胎土には石英砂粒が多くみられる。中期前半頃か。12は弥生土器の甕の口縁部破片で3と同類。13は弥生土器の甕底部の破片で底部外面から体部にかけての差がやや不明瞭になりつつある。胎土には石英・雲母片が多量に含まれる。14は弥生土器の甕底部の破片で胎土は砂粒をほとんど含まず精緻。後期前半頃か。15は弥生土器の甕底部の破片。16は弥生土器の甕底部の破片で細砂粒はみられ



- I. 淡茶色土
- II-1. 黒茶褐色土
- II-2. 淡色褐色土
- III. 暗灰色土
- IV. 淡茶色土

第5図 錦遺跡 調査地境界土層図〔1/40〕



第6図 錦遺跡 1号溝状遺構 (SD-01) 出土土器実測図 [1/3]



1 錦遺跡（北東から）



2 溝状遺構（南東から）



3 溝状遺構断面（北東から）

るが胎土は精緻。17は弥生土器の甕底部の破片で底部外面はやや上げ底上となっている。前期後半ごろか。18は弥生土器の破片で甕底部と考えられるが、蓋の取手の可能性もある。19は18と同様、甕底部と考えられるが、蓋の取手の可能性もある。20は脚付甕の底部破片と考えられる。外底面の一部にハケ目が残る。21は弥生土器の壺の底部破片で、外底面から胴部河畔に1次黒斑が見られる。後期中頃の所産か。22は弥生土器の高坏の口縁部破片で鋤先状を呈している。23は器台で胎土に石英、雲母粒子を多量に含んでいる。

遺物観察表

母国	番号	発掘 番号	出土 遺構	器種	残存	口径 長さ (cm)	底径 幅 (cm)	高さ 厚さ (cm)	調査	色調/胎土/焼成	備考
第6国	1	R-2 SD-01	甕	口縁部片		(18.4)			ハケメ	内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩、黒石を多量に含む/やや不良	
第6国	2	R-19 SD-01	甕	灰帯のついた細片						内淡黄茶色。外淡黄褐色/片岩の砂粒を含む/やや不良	1と同一體か
第6国	3	R-23 SD-01	甕	口縁部片		(25.2)			オサエ	内淡黄茶色。外黄褐色/片岩の砂粒と赤色粒を含む/やや不良	
第6国	4	R-12 SD-01	甕	口縁部細片						内淡茶色。外淡茶色/片岩、角閃石の砂粒を含む/やや不良	
第6国	5	R-16 SD-01	甕	口縁部細片						内淡黄褐色。外淡黄褐色/片岩、角閃石、赤色粒の砂粒を含む/やや不良	
第6国	6	R-14 SD-01	甕	口縁部片						内淡黄褐色。外淡黄褐色/片岩、角閃石、赤色粒の砂粒を含む/やや不良	
第6国	7	R-10 SD-01	甕	口縁部細片						内淡黄褐色。外淡黄褐色/片岩の砂粒をほとんど含む/やや不良	
第6国	8	R-9 SD-01	甕	口縁部細片						内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩の砂粒を含む/やや不良	
第6国	9	R-20 SD-01	甕	口縁部細片						内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩、角閃石、赤色粒の砂粒を含む/やや不良	
第6国	10	R-15 SD-01	甕	口縁部細片						内淡茶色。外淡茶色/片岩の砂粒を含む/やや不良	
第6国	11	R-6 SD-01	甕	口縁部細片					口縁部付け根に指線痕	内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩、石英砂粒を多く含む/やや不良	
第6国	12	R-13 SD-01	甕	口縁部細片						内淡茶色。外淡茶色/片岩、角閃石の砂粒を含む/やや不良	
第6国	13	R-21 SD-01	甕	底部片		(7.3)				内淡茶色。外淡茶色/片岩、石英、雲母の砂粒を多く含む/やや不良	
第6国	14	R-1 SD-01	甕	底部片		(9.6)			ハケメ	内淡黄茶色。外淡黄茶色/砂粒を含まず腐蝕/やや不良	
第6国	15	R-7 SD-01	甕	底部細片						内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩の砂粒を多く含む/やや不良	
第6国	16	R-8 SD-01	甕	底部細片						内淡黄褐色。外淡黄褐色/片岩の砂粒を含む/やや不良	
第6国	17	R-4 SD-01	甕	底部片		(6.8)				内白みがかった黒茶色。外白みがかった黒茶色/片岩の砂粒を多く含む/やや不良	
第6国	18	R-5 SD-01	甕(蓋?)	底部片		4.4			指オサエ	内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩、角閃石の砂粒を含む/やや不良	
第6国	19	R-18 SD-01	甕(蓋?)	底部片						内淡黄褐色。外淡黄褐色/片岩、赤色粒の砂粒を含む/やや不良	
第6国	20	R-11 SD-01	甕	底部片			6.2		ハケメ	内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩、角閃石の砂粒を含む/やや良好	
第6国	21	R-3 SD-01	甕	底部細片					ハケメ	内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩の砂粒を含む/やや不良	外意面から胴部下半に1次黒斑
第6国	22	R-17 SD-01	高坪	口縁部細片						内淡黄茶色。外淡黄茶色/片岩の砂粒を含む/やや不良	
第6国	23	R-22 SD-01	鉢台	上部片						内淡茶色。外淡黄褐色/片岩、石英、雲母粒を多量に含む/やや良好	残存幅6.8cm 残存高7.0cm



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

PL 2



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23

報告書抄録

ふりがな	にしきいせき							
書名	錦遺跡							
副書名	福岡県八女市納楚所在遺跡の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第102集							
編著者名	永田寧							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	834-8585 福岡県八女市本町647 TEL 0943-23-1982							
発行年月日	西暦 2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしきいせき 錦遺跡	ふくもくけん 福岡県 やめしろうさあがにしき 八女市納楚字 錦	402109		33° 12' 51"	130° 34' 10"	20121224 ～ 20130208	約 64 ㎡	携帯電話 基地局 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
錦遺跡	集落	弥生時代		溝状遺構		弥生土器		

錦遺跡

八女市文化財調査報告書 第102集

平成26年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田1899-1